

論文内容の要旨

氏名	古家一 洋平
Efficacy of autogenous bone grafts preserved in 80% ethanol solution for preventing surgical site infection after cranioplasty: a retrospective cohort study (和訳) 80%エタノールを用いた骨片保存法の術後創部感染に対する予防効果の検討	

論文内容の要旨

著明な脳圧亢進症状を呈する重症頭部外傷、重症脳卒中患者に対する減圧開頭術(DC)は生命予後を改善するとの報告がある。脳腫脹の改善とともに、脳保護目的、整容面からも頭蓋形成術が必要となる。頭蓋形成術に用いられる骨片として、自家骨、人工骨が挙げられる。さらに自家骨ではその保存法もいくつか報告されている。頭蓋形成術に関する周術期合併症はいくつかの報告があるが、その中でも特に重要なものとして創部感染(SSI)が挙げられる。当施設ではこれまで例外を除き、自家骨を用いた頭蓋形成術を行ってきた。骨片に関しては大腿筋膜上や腹直筋膜状の皮下に埋没し保存してきた。しかし DC 中に他の手術部位が必要となり、手術時間の延長や出血のリスク上昇などのデメリットもあった。より簡便で低侵襲な骨片保存法として80%エタノールを用いた報告がある。しかしこの報告ではSSIに関するリスク評価は行っていなかった。そこで今回我々は自家骨骨片保存法によるSSIに対するリスクについての検討を後方視的に行った。対象は2008年から2019年に当院でDCを施行した患者のうち、自家骨を用い頭蓋形成術を行った連続症例。SSIは画像所見や臨床症状から創部の感染が疑われ、腐骨除去が施行されたものとした。SSIのリスク評価として、保存法とともに、年齢、性別、病態、硬膜形成法、糖尿病の有無などを併せて評価した。172例のDCが施行され、内149例で頭蓋形成術が施行された。22例で人工骨を用いた頭蓋形成術が施行され、最終的に127例が登録された。エタノール群(A群)が56例、皮下埋没群(B群)が71例であった。全体で10例にSSIが認められた。A群、B群でSSIの発症に有意な差は認めなかった(8.9%, 7.0%, $p=0.748$)。今回の検討では80%エタノールを用いた骨片保存法は皮下埋没法と比較してSSIのリスク因子とはならなかった。Limitationとして、症例数が少ないこと、後方視的研究であること、単施設研究であることなどが挙げられるが、80%エタノールを用いた骨片保存法は皮下埋没法に比べSSIのリスクを上げず、低侵襲で低コストな方法である可能性が示唆された。